

中国における小泉八雲

劉 岸 偉

ラフカディオ・ハーンの文業が中国の読書界に広く迎

えられたのは、一九三〇年代だったように思われる。中国においても、小泉八雲という漢字名で知られていたこの作家は、時の移り変わりによって、異なるアクセントで読まれ、もろもろの文脈で語られていたのである。日本文化をこよなく愛した親日家として、情熱的でしかも巧みな教授法を心得た最良たる西洋文学の紹介者として、国民性研究の道を切り開く先達の一人として、エキゾチックで情緒に富む名文を残したエッセイストとして、それに時には日華親善を訴える国策文学のカムフラージュ

ラージュとして、といった具合であった。

作家没後に起こったこれらのドラマは、もちろん本人の与り知らないところだったが、中国の文壇・読者と小泉八雲との出会いは、中国近代文化史に書き込まれるべき一章であると同時に、中国での小泉八雲の運命は、近代中日関係の消長盛衰のある側面を書とめた証言でもあった。さらにその毀誉褒貶は、本人が生きていた土地の埒外になされただけに、近年見直されつつあるハーンの多彩な文学活動を客観的に捉え、その豊饒かつ錯綜する作品世界を照らしだす光源の一つになると信ずる。

小泉八雲に関する最初の紹介をつきとめるのが難しい。しかし一九二〇年一〇月二三日『晨报』第七版に載せた周作人による「親日派」は、小泉八雲に言及したかなり早期の文字の一つだったに違いない。

当時の中国では、「親日派」は、売国奴・非国民ほど露骨ではないが、はなはだ不名誉な言葉であった。一九一九年四月、山東省における旧ドイツの利権を日本に譲るというヴェルサイユ講和会議の決定に憤激し、五・四運動が勃発したことを思い出せば、時代の雰囲気がかかるであろう。まさにその故に、日頃日本研究の必要性を説き、日本文学を翻訳し、日本の新しき村を熱烈に紹介しつつあった周作人にとっては、「親日派」は複雑な思いを抱かざるを得ない言葉であった。だが、周作人の解釈は世の通念をつき、実に見事である。中国の民族利益を損ない、利欲にたかる連中は、実は真の親日派にはほど遠いものだと言はいう。

「一国の栄光はその文化——學術と文芸にある」と周

作人がそう語る時に、彼の胸に去来していた人物は、日本の學術と文芸を西洋に伝えた小泉八雲であった。次の一節を引用させていただく。

中国には真の親日派がいなかった。なぜなら、日本国民の真の栄光を理解した人が中国にはいなかったからである。日本の文芸および美術を語る一冊の書物、あるいは一篇の文章すら中国の出版界に現れていないという一事を見ればそれはわかるはずである。日本国民はかつて一人の知己を得た。小泉八雲 (Lafcadio Hearn) がそれである。彼こそ真の親日派である。そのような人は中国にいたのだろうか。私は慙愧にたえずいうのだ、そのような人はいないと。中国近代文化の生みの親の一人、日本とも縁の深いこの文化人は、小泉八雲を日本研究の先達としてつねに意識し、尊敬の念を抱いた。一方、八雲の日本論のある側面に異を唱え、それを糧に自らの文化論を構築していく。

小泉八雲の全貌——彼の家系、幼年時代、アメリカで

の生活、日本行き、結婚と帰化、エリザベス・ビスランド女史との交友、書簡の特色、英文学講義、文芸批評――をはじめて中国の読者に示したものは、やはり朱光潜の「小泉八雲」(『東方雜誌』第二三卷第一八号に初出、後に『孟實文鈔』所収)を取りあげるべきであろう。朱氏は五・四以降の北方文壇で活動し、リベラリズムを標榜する作家群、いわゆる「京派作家」の中心メンバー、文芸心理学者であつた。一九二五年にヨーロッパへ留学、イギリス、フランスの大学で、文学、心理学、哲学、芸術史などを専攻、帰国後北京大学で西洋文学史と文芸心理学を講義する。ハーンの著書に接して「小泉八雲」を執筆したのは留学中のことだったらしい。この長い論文において、朱光潜はハーンの書簡を白眉と薦めたビスランド女史の説を引いて、自分の同感をこう語っている。

……彼の手紙の大半は多忙中に気のむくまま筆を走らせてなったものが故に、自然に胸より流れ出るもので、素朴で飾り気がない。彼の情熱、彼の幻想、

彼の偏見などが手紙の中で丸だしになっているのだ。日頃に書物を著し、文章を作るのに、多少なりとも作為の跡を免れないが、手紙だけは完全に自分の楽しみであるが故に、すべての拘束からのがれているのだ。彼の手紙で音や形を描くものであるう、土地の風俗を語り、自身の生活を記すものであるう、あるいは文学や音楽を話題にするものなどは、いずれも細々と描かれて実に面白い。

このくだりは明末小品の趣を論じ、手紙の天然の美を説く周作人の語り口を彷彿とさせて興味深い。京派作家群と周氏との精神的つながりを思い起こせば、おのずと領かれるところだが、三〇年代の「小品文」ブームとイギリス流エッセイの受容という時代背景を念頭におけば、小泉八雲の創作と批評が中国でいかに読まれていたかを掘り下げることは比較文学研究の豊かな水脈につながるであろう。

東洋の学生を相手に西洋文学を教授する経験を踏まえ

て、朱光潜は小泉八雲の英文学講義をとくに重宝し、賛辞を惜しまない。コルリッジ、サントルブーヴ、セインツベリーたちに比べると、ハーンの偏狭と浅さに気付くだろうが、しかし「私にとつてもっとも味わい楽しめるものはこれら批評界の泰斗ではなく、小泉八雲にある」と朱氏はいう。

一九三〇年代に入ると、「五・四」以来の新文学はこまですでに一〇年近くの蓄積があり、ほぼ不動の地位を確立した。理論と創作の両面にわたってかつてない成熟を示す一方、外国の思想、文芸も潮の如く中国の文壇を席捲したのである。小泉八雲の著書が中国語に翻訳され、広く読まれていたのもこの時期であった。一九二九年上海の北新書局から『西洋文芸論集』（侍桁訳）が刊行された。その原書はおそらくコロンビア大学のジョン・アースキン教授の編纂になるハーンの東大英文学講義録『文学の解釈』（二巻、ニューヨーク、ドッドミード社、一九一五年）であろう。それを皮切りに、ハーン

の作品は次々に訳されていく。『文芸譚』（石民訳注 上海北新書局 一九三〇年）、『日本與日本人』（胡山源訳 上海南務印書館 一九三〇年）、『文芸十講』（楊開渠訳 上海現代書局 一九三一年）、『文学講義』（惟夫訳 北平聯華書局一九三一年）、『英国文学研究』（孫席珍訳 上海現代書局 一九三二年）、『文学的畸人』（侍桁訳 上海南務印書館 一九三四年）、『心』（楊維銓訳 上海中華書局 一九三五年）などが挙げられる。

書物として出版される以前に、小泉八雲の作品はおもに『語絲』や『奔流』などの雑誌で紹介されていた。前者は魯迅、周作人を中心に、一九二四年十一月北京で創刊された文芸週刊誌、後者は一九二八年上海で発行され、魯迅、郁達夫が編集に携わった文芸月刊である。一九二九年一月、侍桁訳「十九世紀前半のイギリス小説」を掲載した。『奔流』第一巻第八期の「編集後記」に、魯迅はこんな感想を漏らしている。

ふつと思ったことだが、中国にいる外国人に、儒

教の經典や諸子の著述を翻訳した者がいるけれども、昨今の文化生活——レベルの高低があるうが、文化生活には違いない——を真面目に世界に紹介した例がめつたにない。おまけに、古書から食人風俗の証拠さがしに躍起になる学者もいるのだ。このあたりは、日本は中国より遙かに幸せである。彼等は、日本の良いものを外に宣伝する一方、外国の良いものを要領よく運び込む外来客によく恵まれているのだ。英文学の分野に関していえば、小泉八雲がその一人である。彼の講義はなんと簡潔明白で、学生の身になるものであろう……

ハーンの英文学講義、文芸評論がかくも広く世に迎えられるたなかで、『日本與日本人』（一九三〇年）は実に異色な一冊であつた。訳者の胡山源は、「訳者自序」で翻訳の動機に触れてこう語っている。

われわれに迫ってきた強力な隣人といえは日本とロシアの二国にはかならない。日本がわれわれをど

う侮つたかはこれ以上いうことはなく、誰もが知っている。ロシアに比べて過ぎたることはあつても、及ばざることはない。かつてわれわれは彼等日本人の詳しい状況がちつともわからなかつた。この頃それに関心を寄せている者が出てきたが、彼等の外観にとどまつている憾みがある。本書は心理、哲学の視点から彼等の生活の全貌を研究しようとするわれわれにとつては、実に有力な参考になる。

滿州事変前夜、中日間にみなぎつた緊迫した空氣を読む者に感じさせる一節である。同年（一九三〇）に新紀元月刊社より発行された『日本研究』創刊号に小泉八雲の「日本文明の天性」（陳彬酥訳）が巻頭を飾つたのもこの文脈で理解されるべき一齣であつた。

日中戦争の勃発は、小泉八雲に思わぬ役柄を押しつけることになる。日本占領期に刊行された雑誌、例えば『風雨談』（風雨談社）、『東西』（古今出版社）、『雑誌』（上海雜誌社）などに八雲の名が散見できる。一九四五

年東方書局より出された『ある女の日記』（新潮文庫版）『日本人の精神』を抜粋したもの、何楠訳）もこの延長線上の一冊であろう。

占領期の文字——長い間タブー視され、おろそかにされてきたその実態を解明するには、さまざまなアプローチが期待される。小泉八雲の登場が一つのユニークな視点となるだろう。

文章は千古に亘たるといわれる。作家の没後、約一世紀を経った今、中国において幾多の流転を閲した小泉八雲は、また新たな読者を獲得したのである。一九九四年天津の百花文芸出版社から「外国名家散文叢書」の一種として、『小泉八雲散文選』が出された。訳者の孟修氏は四〇年前にハーンに導かれてイギリスロマン派の詩境に沈み入った文学青年だった。

なお、原作と訳者は不明だが、小泉八雲の名を冠した『日本聊齋故事』（中国国際広播出版社、一九八九年）なる翻案物がまわっていることを最後に付記してお

く。「中国における小泉八雲」というドラマはまだまだ続くようである。

付記 この小稿は目下進めている研究「小泉八雲と中国」の一部抜粋です。

一九九七年十一月三〇日